



Title	宮澤賢治と羅須地人協会：その活動に駆り立てた力について
Author(s)	ベルテリ, ジュリオ アントニオ
Citation	日本語・日本文化. 2005, 31, p. 27-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8341
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

<研究論文>

宮澤賢治と羅須地人協会

——その活動に駆り立てた力について——

ベルテリ・ジュリオ・アントニオ

はじめに

ひ
陽が照って鳥が啼き
あちこちの^{なら}榎の林も、
けむるとき
ぎちぎちと鳴る^{きた}汚ない^て掌を、
おれはこれからもつことになる

『春と修羅』第三集より

突如、作家・詩人宮澤賢治は人生最大の決断をした。農学の教諭として勤めていた花巻農学校を辞職し、1926（大正15）年4月1日、下根子櫻¹⁾の別荘に移る。そこで、賢治は、自給自足生活に踏み切り、本当の農民のように一所懸命畑を耕し始めた。同時に、彼は1920年代後半の農村の悲惨な生活を改善するために農学講座、レコードコンサートや童話朗読会を開き、そして無料の肥料設計相談場まで設けた。いわゆる「羅須地人協会」の誕生である。

非常に多面的な「羅須地人協会」の活動を司るには相当の体力が必要だった。もともと、賢治のような弱々しい、風に飛ばされそうな体格をした人はその厳しい生活には長期間耐えられないだろう。しかし、そんなことをものともせず、賢治の身体は、不思議な力に取り憑かれていたかのように、忙しく動き続けていた。佐藤隆房氏²⁾は羅須地人協会の賢治について、次のようなエピソードを残す。

賢治さんが櫻に住んで間もない頃、弟子の菊田がひょっこり訪ねて行きまし

た。

「先生。先生。」

と呼んだが返事がないので、横手の方へ廻つて行つて見ました。すると賢治さんはよほど疲れてあるとみえて、オルガンに寄りかゝつて眠つてゐました。暑い時なものでしたから網のシャツ一枚にカーキ色のズボンをつけ、穴の大きくあいた薄汚れた靴下を、腫の所を前むけに履いてゐました。腕には蚋に喰はれた後が一面にぶつぶつと赤く腫れあがつて見えてゐます。片々の足首には鉋か何かでいためたやうな大きな傷がパツクリと口を開けてゐます。その囲りはヨード丁幾を塗つたと見えて黄色くなつてゐました。

学校にゐた頃の先生とは、餘りに違ふひどい有様なので、菊田君はたゞ胸を打たれました。

やがて目を覺まされたので菊田君も家に上がつて行つて、

「先生。ずる分ひどうがすべ。」

といひますと、

「最近は大分よくなつた。初めのうちは一日かかつても二坪の開墾がやつとのことで、その癖身體が痛んで困つたよ。だが今ではその三倍も開墾が出来るし、書く方も前の生活の頃よりもうんと書ける。お蔭でおれも一人前の百姓になれさうだ。」

といつてニコニコしてをりました。

（大正十五年八月）³⁾

この一文は羅須地人協会時代の賢治の姿を鮮やかに印象づけるものである。賢治は農機具を置いて、その傷だらけのくたびれた体を「文化の道具」であるオルガンに縋り、睡眠の緩やかな波に乗りながら魂を癒してもらう。数ヶ月間で「一人前の農民」になった賢治は、骨の折れる開墾作業に全力を尽くしていたものの、彼の家を訪れる人を必ずいつもの笑顔で歓迎していた。賢治は自給自足生活を始めてから、他の農民の気持ちを大事にするために、自ら食生活を最低限に切りつけていく。

賢治さんの粗食は、櫻の住居になつてから、益々その度を高めて來ました。

魚肉類は再び嚴重に斷つてしまひました。腹さへくちくなればいゝといふやり方で、納豆を買って來た時は納豆ばかり、豆腐を買って來た時は豆腐ばかり、何もない時は醤油をかけて御飯を喰べました。

御飯は釜の許す限り幾日分でも一度に炊いて置いて、冬は凍つたのをガリガリと喰べ、夏は腐らぬやうにと笹の中に移して、それを井戸の中に吊して置くといった具合です。… (昭和二年)⁴⁾

まさに修行者並みの食生活である。しかし自然の中に生きている賢治にとって、それは大の御馳走だった。少しの醤油をかけた御飯、太陽のあたたかい陽射しと妙法蓮華經以外に、賢治に慾はなかった、という。

賢治さんは、食物ばかりでなく何でもかんでもお百姓と一緒にしようとするらしく、協會をおいた家へはやすまず、北側の崖下の窪地に小屋を建てゝ住んでゐたことがあります。そしてオルガンやセロなども用意してあつたのですが、晝間皆が働いてゐる時に、そんなものをやつては申譯ないといふので、夜遅く、人の寝靜まつた頃やつてゐました。そのオルガンやセロは、たゞの道樂ではなくつて、それから種々な詩が生れ出たのですが。 (櫻時代)⁵⁾

賢治はこのように、他の農民の生活と心を尊重しながら、夜中樂器を弾き、果てしない天の川を見渡しながら芸術的インスピレーションを待っていた。また、農民のために農学や化学の知識を活用していた賢治の優しさは限度を知らないものだった。まるで慈悲深い菩薩のようであつた。農民、そしてあらゆる人間に最高の幸福をもたらすことによってより良い世界を築く意志があつた。だから働き続け、自分の身体を大地に捧げる。

雨ニモマケズ、風ニモマケズ、賢治は大自然に溶け込み、慾のナい質素な生活を送り、ジブンヲカンチャウニ入レズニ、当時の貧窮に苦しんでいた農民達のために全ての力を注いでいた。ヒデリノトキハ、畑にナミダの雨ヲナガシ、サムサノナツもオロオロアルキながら、曇りの空を不安に満ちた目で眺めていた。賢治はホメラレモセズ クニモサレズ サファイウモノで「あつた」。

しかし、宮澤賢治は本当に以上の逸話などに描かれた寛大で純粋な人だったのか。このような賢治像を信用してもいいのか。本研究はこれらの単純な疑問から生まれた。

無論、記録されている逸話は全部嘘偽りであるというわけではない。賢治が必死に働いていたのも、粗末なものを食べていたのも事実である。羅須地人協会の設立は一方で、賢治の人生におけるクライマックスであり、他方、その最も異常な展開でもあった。

賢治は一体、どのような力に駆り立てられ、協会活動に踏み切ったのか。この疑問への答えを出すのが本研究の目的である。

ただし、本研究はあくまでも「賢治という歴史的人物」を中心とする研究であり、賢治の作品研究ではない。つまり、本稿では賢治の作品の文学的価値についての評価は一切行わない。従って、資料として筑摩書房の全集に収録されている全ての書簡（特に1910（明治43）年から1928（昭和3年）までの時期）、そして当時の新聞記事や雑誌などの一次的文献を最優先し、そういった文献で包括できない範囲を、準一次資料（つまり、賢治と相当深い関わりがあった宮澤清六氏⁶⁾、佐藤隆房氏、森荘巳池氏などが執筆した覚え書きや記録）で埋める。そして、中村稔氏、青江舜二郎氏、佐藤成氏などの賢治研究者が執筆した論文（二次的資料）を利用し、彼らが行った研究の立場、そしてそれぞれの賢治の見方についても論じていく。なお、本研究においては、賢治の童話や短編小説は原則的に資料として用いない。

1. 宮澤賢治と羅須地人協会

賢治は神様でも菩薩でも宇宙人でもない

客観的な研究を行うために、賢治を「時代を生きた人間」として扱わなければならない。賢治を「生きた菩薩」、「神様に近い人間」、「超自然的な存在」のように称える論文が非常に多く存在する。このような研究の出発点はしばしば、賢治の法華経信仰であり、賢治を「スーパーマン」のような存在として観ている。その結果、賢治を客観的に見られなくなってしまう傾向がある。勿論、仏教は賢治の人生に著しい影響を及ぼしたのであるが、仏教的理想に集中する余りに、賢治

はどのような人間だったか、どのような時代に生まれたのか、そしてどのような人生を送っていたかを見失ってしまう可能性がある。

賢治の本性について、様々なことが言われている。極端な意見の一例として、詩人・評論家宗左近の評価を見てみよう。

この詩人は、誰よりも、そして何よりも、謎です。なぜか。他界から来た人だからです。当今の言葉でいえば、宇宙人。したがって、その言葉は宇宙語の日本語訳なのです。極めて難しいのです。

賢治は風変わりで謎だらけの人物ではあるが、確実に宇宙人ではない。彼は地球、日本の岩手県花巻市に生まれた人間である。

賢治の生涯

賢治の人生は三つの段階に区分できる。第一段階は誕生——1896（明治29）年から1921（大正10）（数ヶ月上京する時）までの時期であり、これは賢治の世界観、考え方、信仰、性格、つまり一般的に知られている「宮澤賢治」が形成される時代である。

第二段階は1921（大正10）年から始まり、1926（大正15）年3月まで続く。24歳の時に賢治は花巻市を出発し、1921（大正10）年1月から8月まで東京で滞在する。ここでは初めて家族からはば自立し、僅か7ヶ月間だけであったが自分の信仰と文学的才能を生かす。これは賢治の文学的人生において、最も多産な時期の一つである。8月に妹の看病をするために帰郷してから同年12月に花巻農学校教諭として雇われる。この第二段階は賢治の人生において、「期待と野望」の時期でありながら、「苦痛と絶望」の時期でもある。賢治の最愛の妹・そして信仰の道連れでもあったトシが死去し、賢治の生涯に大きな衝撃を与える。更に「心象スケッチ」の世界に溺れ、自分の複雑な気持ちを『銀河鉄道の夜』のような童話と詩集『春と修羅』に映す。1924（大正13）年に、賢治は自分の血と涙と想像力の結晶である『春と修羅』、そして童話集『注文の多い料理店』を出版した。しかし、その企ては世間に無視され、失敗に終わる。このように夢と野望を完全に見

失った彼は強烈な焦燥感を覚えていたのではないだろうか。

この時点で、第三段階がはじまる。1926（大正15）年4月に賢治は花巻農学校を辞職し、「羅須地人協会」での生活に踏み切り、厳しい自給自足生活を始めるのである。これは賢治の人生におけるクライマックスとも言える。過労と栄養不足の結果、病気に罹る。結局、羅須地人協会も僅か二年後に失敗に終わった。その後、病気から回復したにもかかわらず、賢治は二度と羅須地人協会の活動を再開しようとしなかった。彼は碎石工場に勤め、またも病気にかかり、静かに死を迎える。協会活動の挫折以後は、もはや賢治に生氣を感じることは出来ない。協会活動は彼の人生の流れにおける最も異常な展開であったに相違ない。では、この羅須地人協会の活動に駆り立てた力はどうなものだったのか。この点を明らかにするのが本稿の最大の目的である。

賢治と大正・昭和の文学界

好奇心溢れる二十歳の賢治は文明と進歩の都・東京への強い憧れに満ちていた。賢治が東京に憧れていた主な理由は三つある。

第一に、遠い岩手県に生まれ育った田舎の坊ちゃん賢治は、世間における彼の役割を求めるために、自分が生きていた時代を身近に感じたかった。その時代、その鮮やかな現実を生で噛みしめたかった。つまり、世界の最新情報・商品・文化的イベント・見世物などの心地よい刺激に自らをさらそうとする。

次に、賢治を東京に引きつけたのは、法華経信仰であった。1921（昭和10）年に、賢治は上京し、「国柱会」の田中智学氏や高知尾智耀氏の下でボランティア活動を行い、多くの童話や詩を執筆した。

そして、最後に、賢治もあらゆる文学者・芸術者の胸に宿る野望（本能と言っても良い）、名声・公認・富を得る意思に動かされ、東京を頻繁に訪れていたと見られる。

矛盾に覆われた大正デモクラシー期の東京に若い賢治が顔を出し、長年かけて磨いた文芸能力を世界に提示したかったのである。しかし、これは文学界において全く無名であった賢治にとって、非常に難しい挑戦だった。

大正時代に童話・童謡のブームがあった。この時代の最も代表的な作家、芥川

龍之介、島崎藤村、谷崎潤一郎などは皆童話を書いていた⁸⁾。この現象のおかげで、鈴木三重吉氏の「赤い鳥」などの童話雑誌が生まれた。

童心の美しさに返って

1918年(大正7)年鈴木三重吉は子供のための文学雑誌「赤い鳥」を創刊した。明治時代を通じて巖谷小波等の努力によつて「お伽噺」として親しまれてきた児童のための物語が、新たに文学として、芸術的香りの高いものにまで引き上げられたのである。

この、児童のために清新で自由な空想の世界をくりひろげようとする「赤い鳥」の童話運動が明治の末年以来型にはまってしまった学校唱歌調を大きく変革することになった⁹⁾

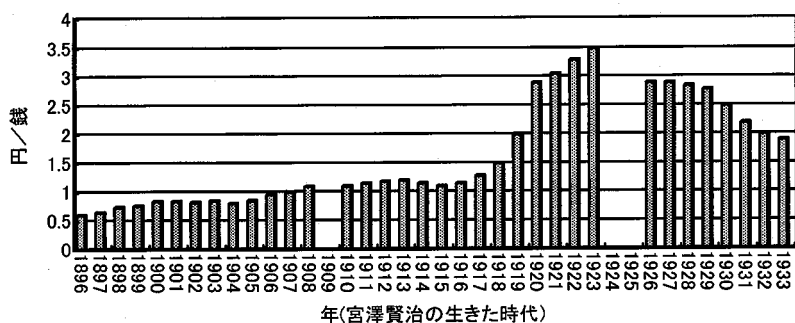
賢治がはじめて童話(「蜘蛛となめくちと狸」、そして「双子の星」)を家族に朗読したのは丁度1918(大正7)年8月である。賢治は確実に、東京の文学界が新しく作り出した童話・童謡の最新流行に影響されていた。

当時の物価と賢治の緩い金銭感覚

1921(大正10)年に数ヶ月間上京する時と羅須地人協会時代を除けば、賢治の生活費、教育費、そして彼の底知れない好奇心や気まぐれを満足させるための財源は政次郎、すなわち嫌っていた質屋・古着屋、更に地主、株主であった父の収入だった。賢治は親に甘やかされ、年月が経っていくにつれて、金銭感覚は緩くなっていく。

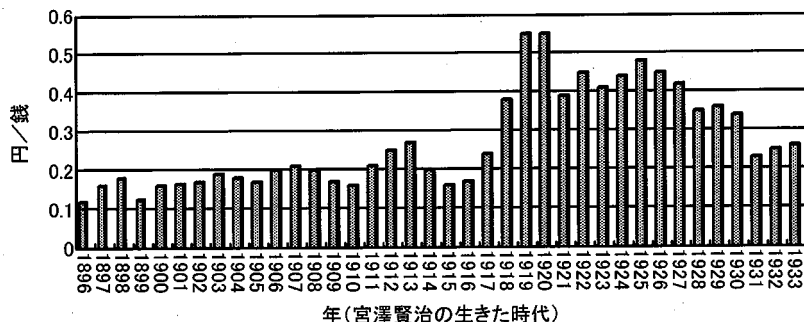
賢治とその家族はどの程度裕福だったか、そして賢治の費やしていた金額の大きさを理解するために、まず、1896(明治29)年から1933(昭和8)年まで¹⁰⁾の物価を分析する必要がある。戦争特需や世界恐慌などでこの時代の物価は激変するため、当時の一円の購買力を確定する作業は甚だ困難であるが、大体の目安を得るために、東京の大工の日給と主食(米)の価格を表したグラフを見てみよう。

次ページのグラフに表示されているように、東京の大工の日給は賢治の生まれた年1896(明治29)年の60銭から1917(大正6)年までは徐々に上がるが、第一次世界大戦後の景気、そして1923(大正12)の関東大震災の時に3円50銭の



グラフ1 1896-1933 東京の大工の平均的賃金 [日給・日本円]

(1909年、1924年、1925年のデータは入手できない)



グラフ2 1896-1933 米価の変動 (日本円/升 [1.8リットル])

ピークに至る。昭和時代に入ると、1927（昭和2）年の2円90銭から1933（昭和8）年の1円90銭にもう一度下落する傾向を示す。この下落は主に1920年代後半の世界恐慌によるものである。

米穀の価格は物価をよく反映するものであるが、無論、収穫そして輸入された量により激しく変動するものである。米を1升購入するためには1896-1902（明治29-35）年の時期に12-18銭が必要だった。しかし、1903（明治36）年から、大正時代の始まりまで日露摩擦が主な原因で徐々に上がり、27銭に達する。1915（大正4）年に、米価調節令の実施により16銭に戻るが翌々年から高騰し、米騒

動の1918(大正7)年に38銭から46銭に上がり、1919-1920年に55銭のピークに達する。大正時代の終りまでは(関東大震災や昭和恐慌の影響で)1升は39-48銭の間に変動する。そして、1931(昭和6)年に、米価の基準価格が決まった結果、1升は23銭に戻る¹¹⁾。

二つのグラフを合わせてみると、1918(大正7)から1921(大正10)の時期を除けば、米価は大工の賃金の変動に比例している。

賢治はしばしば父親に割り増しの金額を求めていた。例えば、1912(明治45)年11月3日の手紙に、16歳の賢治は正座法指導を受けるなどのつもりで、父を説得し、仕送りを頼む¹²⁾。

盛岡高等農林学校の研究生になったとき、地質調査を行うために稗貫郡から奨学金(全額150円程度)を受けるが、父親からの仕送りを受け続ける。例えば、1918(大正7)年6月6日の父親への手紙¹³⁾に60円を送ってもらうように依頼する。当時の1円はざるそば10杯の価格で、100円は、東京の日本橋の地価で言うと五分の一坪(凡そ0.6612平方メートル)の価格であったことに基つけば、賢治が父に請求していた金額は極めて高い。

賢治の請求する金額が吊り上がる一方で、1919(大正8)年1月31日の手紙において、賢治はある事業計画¹⁴⁾を父に提案する。

而して第一期の方に要する資本は先づ二百円乃至三百円あれば充分に有之、但しその中を大きく始むるならば流通資本の更に多くを要する次第に御座候。

第二期の仕事の方は先づ千円以上を要することとなるべく但し之は前の方に得たる収入によりて次第に設備をする方可然と存じ候¹⁵⁾。

当時22歳の賢治にとって、父はまるで銀行のように扱われている。この時期、未だ研究生として盛岡高等農林学校に属していた賢治の将来は真っ暗だった。賢治を待っていたものは家業の外に何もなかった。従って、様々な計画をたて、何とか身を立てようとしていた賢治は必死だった。賢治はまだ仕事の経験はなく、その計画が成功する可能性は極めて低かった。もちろん、父はこの費用のかかる

息子のわがままに耳を傾けなかった。

賢治は未だに社会の厳しさ、そして仕事や責任の重さを知らなかった。社会を甘く見すぎていた。結局、賢治は1919（大正8）年東京から花巻に帰って、嫌々ながら家業に従事しはじめた。しかし、やがて1921（大正10）年1月に彼はもう一度上京し、七ヶ月間自立した生活を送る。この時期、生活費を賄うために、赤門前の文信社で謄写版印刷製版の仕事に従事し、午後は田中智学の国社会のための街頭布教と本部での奉仕活動に励んだ。

実際、賢治の生活費のほとんどは父親が出していた。更に、花巻農学校教諭時代の給料¹⁶ 全額を本、レコード、絵画、観劇、農学校で行われていた様々な行事や活動に使い尽くした。

また、賢治はレストランなどでチップを払う習慣があったが、五十銭・一円ではなく、十円を与えたりすることもあった¹⁷。

つまり、賢治は金銭を稼ぐのは苦手だったが、人の財産を浪費する独自の才能があったと言える。

一方では、裕福な家庭に生まれることによって、賢治は質の良い教育を受け、趣味を生かし、独特の文学的世界を築くことができた。しかし、他方ではこの地位と、それから生じるルーズな金銭感覚は理想的に満ちた青年賢治の厳しい社会との交渉を遮るモノに化したのである。

羅須地人協会の様々な活動

賢治は1926（大正15）年4月に、花巻農学校教師を退職し、花巻町の東南にある下根子樓という場所で、父の所有物であった二階建ての別荘¹⁸ を利用し、同年8月に羅須地人協会¹⁹ を設立した。そこで、賢治は自給自足生活を選んだため、協会の建物の近辺にあった畑（「下の畑」とも呼ばれていた——これも父の所有物）を耕し、全く農民の様な生活を送り始めた。

羅須地人協会では様々な活動が行われていたので、この組織を定義するのは非常に難しい。基本的には農民向けの農学塾のようなものだった。しかしながら、「はじめに」でも触れたように、そこで賢治は農業指導を行っていただけでなく、様々な文化・芸術活動（レコードコンサート、オークション、童話朗読会など）

にも励んでいた。

ともかく、この協会の規模は非常に小さかった。佐藤隆房氏が述べるように、賢治が用意していた椅子やスリッパの数から見れば、羅須地人協会を定期的に訪れていた会員は十人に足りなかったことがわかる。

当時の教育水準の低い農民たちの大多数は、飢餓の具体的な苦痛につきまといわれていたので、とても賢治の理想的な考え方そして科学に関する専門用語に溢れる話についていけなかったことは事実である。櫻部落の青年たちの一人伊藤忠一氏は次のように述べる。

何しろ宮沢先生は、あの当時で高等専門の学校を出ておられたし、私らは小学校きりなもんだから、先生の所に集まってもさっぱり話が合わないもんでした。始めの頃はこの辺の部落の青年たちが、十五、六人も集まったものですが、そんなわけでだんだん減って五、六人になってしまったのです。そこで先生は、音楽ならば皆の共通なものだからとやり始めたものでした²⁰。

音楽や他の娯楽活動は賢治の単なる趣味のほかに、会員を惹き付ける効果的な手段だった。しかしながら、賢治の羅須地人協会時代の日常生活は文化的活動と農学講座だけではなかった。上述の通り、賢治は自給自足生活を選んだ故、一方では、無謀な畑労働にも従事し、他方では、質素な生活を送っていた。

「はじめに」に引用した佐藤隆房氏が編集した様々な逸話も、賢治を褒め称える傾向があるものの、協会時代の賢治を理解するために、極めて重要な資料となる。

『農民芸術概論』

『農民芸術概論』は賢治の執筆したものの中で、文学ではない唯一の作品で、これは羅須地人協会のイデオロギーを紹介するテキストである。ただし、その綱要を調べると、その中身は極めて抽象的で難解なものであることがわかる。

農民芸術の綜合 ……おお朋だちよ いっしょに正しい力を併せ われらのすべての田園とわれらの全ての生活を一つの巨きな第四次元の芸術に創りあ

げようでないか……

結論 ・われらに要るものは銀河を包む透明な意志巨きな力と熱である²¹⁾

また、序論において、『銀河鉄道の夜』にも含まれた賢治の非常にユートピア的な幸福論も現れる。

俺たちは皆農民である ずいぶん忙しく仕事もつらい
もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい
われらの古い師父たちの中にはそういう人も応々あった
近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい
世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない
自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する²²⁾

この乱雑な『農民芸術概論』の主要な点は基本的に、当時の厳しい状況に陥っていた農民たちの生活水準を、「芸術」を利用しながら向上させることによって、最大の幸福に到達させることにある。賢治の羅須地人協会時代の生活はこのユートピア的なイデオロギーを反映しているということはしばしば指摘されるところである。

このイデオロギーはどこから、どの時期に生まれたのか、そしてそれは賢治が考え出したものであるかということを調べる必要がある。

『農民芸術概論』の思想は紛れもなく、賢治が花巻農学校で教諭として働いていた時 1924-25（大正 13-14）年に生まれたものであるに相違ない。しかし、吉見正信氏は『『農民芸術概論』の経緯』という研究において、『農民芸術概論』のイデオロギーは賢治のオリジナルな発想ではないと述べている。賢治は花巻農学校で、「農民芸術」というタイトルの講座を担当していたのである。その講座の主題・テーマである「農民芸術」は実際、賢治が考えたのではなく、県が指定したものであった。更に、『農民芸術概論』と『農民芸術概論綱要』はその講座を準備するためのメモである可能性があると吉見氏は指摘する²³⁾。

以上、賢治が羅須地人協会の活動に入るまでの経緯を、通説を踏まえながらも、やや異なった角度から述べてきた。では、賢治と羅須地人協会の活動に駆り立てた力とは一体何だったのだろうか。次節でこの点について詳説したいと思う。

2. 羅須地人協会に駆り立てた力

賢治を動かした力

賢治は羅須地人協会を設立した時は、どのような力に駆り立てられていたのかという疑問が、本論の中心テーマとなっている。花巻農学校を辞め、羅須地人協会へ駆り立てた力はポジティブ（積極的）なものか。それともネガティブ（消極的）なものか。

この問題について、佐藤成氏は『宮沢賢治 地人への道』において、次のように述べる。

賢治は何よりも農民を愛した。愛さなくてはならぬという内なる声に強く動かされたのであった。賢治は科学と宗教、芸術によって農民を救い啓蒙しようとした。²⁴⁾

また、中村稔氏は、『定本・宮澤賢治』において、賢治の手紙を調べた上で、このように論じる。

勿論、宮沢賢治が羅須地人協会にまで行かなければならなかった事情は複雑である。〔中略〕その複雑な事情の一つとして、僕は農民芸術概論の制作を考える。²⁵⁾

賢治についての徹底的な研究を行った佐藤氏も、中村氏も、羅須地人協会に駆り立てた力は主として賢治の理想主義から生まれたポジティブなものだったという。つまり、賢治は農民への愛、そして世界に幸福をもたらす理想に動かされ、協会活動に踏み切ったというのである。果たして、その力は真にポジティブ（積極的）なものだったのだろうか。

賢治は花巻農学校を辞めた理由と事情

賢治は1921（大正10）年12月から稗貫郡立稗貫農学校（後花巻農学校）で農学を教え、平均よりやや高い給料を貰っていた²⁶⁾。にもかかわらず、未だに実家で生活し、生活費は完全に親が負担していた。

賢治は初めの頃、学校で文芸などについての話が通じず、ストレスも溜めていたことが次の1921（大正10）年12月の書簡からの引用を見れば、はっきりとわかる。

一向いけません。学校で文芸お主張して居ります。芝居やをどりを主張して居ります。けむたがられて居ります。笑はれて居ります。授業がまづいので生徒にいやがられて居ります²⁷⁾。

賢治はこの手紙を書いたのは教諭として雇われたばかりの頃だった。ただし、その後、花巻農学校での生活は徐々に楽しくなっていたものの、賢治の精神状態は安定しないままだった。逆に、この彼の精神状態は、1922-1925（大正11-14）年の不快な出来事（主に最愛の妹トシの死去、そして親友保坂嘉内との離別）で更に悪化する。

1922（大正11）年1月1日から1925（大正14）年2月9日にかけての時期に、賢治が知人に書簡を宛てたかどうかは不明である。なぜなら、天沢退二郎氏が編集した『新校本・宮沢賢治全集』の第15巻（『書簡』）において、この時期の手紙は一通も収録されていないからである。そのため、この時期の賢治の複雑な精神的状態を描き出すためには、その他の資料を利用し、この空白を埋めなければならない。

中村氏が正しく指摘するように、賢治が学校やめる前に、『春と修羅』第二集末尾にある『告別』²⁸⁾、そして第三集にある『春』という詩は、賢治は何らかの力に押されて、学校を無理矢理に辞めなければならなかったことをほのめかす。『告別』において、次のように賢治は書く。

おれは四月はもう学校に居ないのだ

恐らく暗いけはしいみちをあるくだらう²⁹⁾

賢治はこの詩を書いた時点で、学校を辞める決断をしていた。「暗いけはしいみち」を歩くことは農民になるという意味であれ、何であれ、これはとにかく賢治が好きでしたいことではないのがはっきりとわかる。そして、『春』という詩において、賢治はこう書く。

ぎちぎちと鳴る汚い掌を
おれはこれからもつことになる³⁰⁾

ここで賢治が「ことになる」という表現を用い、まさに「ぎちぎちと鳴る汚い掌」を持つのが賢治の意志によって決まったことではないというのは明らかである。つまり、賢治は何らかの力に駆り立てられ、学校を辞めたのである。

1925 (大正 14) 年 12 月 1 日に、賢治は弟宮澤清六氏にこのような手紙を送る。

すぐご返事するのですがこの頃畠山校長が転任して新しい校長が来たりわたくしも義理でやめなければならなくなったりいろいろごたごたがあったものですからつい遅くなったのです³¹⁾。

転出した校長は畠山栄一郎氏で、花巻農学校の設立者だった。非常に度量の大きな人で、賢治の風変わりの教育方法を好んでいたため、彼を自由に活動させていた。しかし、畠山氏の代わりに新しく着任した校長は中野新左久という人で、賢治と犬猿の仲だった。この新しい校長は非常に真面目で因習的な人物で、殊に賢治の脱線教師ぶりを喜ばなかったという³²⁾。この事情について、森荘巳池氏が『宮澤賢治の肖像』に様々な記録を残している。

ただし、これは賢治が農学校を辞めた唯一の理由であるとは考え難い。なぜならば、中野氏が畠山氏を継いだのは 1925 (大正 14) 年 11 月のことで、賢治は七ヶ月前 (4 月) から学校を辞めることを企てていたからである。1925 (大正 14) 年 4 月 13 日、杉山芳松氏宛ての手紙に賢治は教師生活の不満を表しながら、花巻農学校を辞め、農民になりたいと書く。

わたくしもいつまでも中ぶらりんの教師など生温いことをしているわけに行きませんから多分は来春はやめてもう本当の百姓になります。³³⁾

従って、学長が転出したから学校をやめなければならないというのは本当の理由ではないということが明らかになる。賢治が弟清六氏に書いた書簡は、家族に学校を辞任する決定を正当化するためのものに過ぎない。実際、賢治はそれと全く別の力に促されていたのである。

巻き戻し

無論、羅須地人協会を設立するという賢治の発想がどのように生まれたかを理解するために、農学校を辞めた状況を調べる必要がある。ただし、これだけではまだ不十分である。

佐藤氏と中村氏は羅須地人協会に踏み切る直前の賢治にのみその答えを求めている。賢治を動かした力の原点、そしてその性質を知るには、更に多くの要素を調べる必要がある。単純な農民への愛、そして農民芸術概論の抽象的な理想の裏に、様々な要因（駆り立てた力）が潜んでいた。従って、これらを発見するために、調べる期間の範囲を広め、少なくとも、1921（大正10）年まで賢治の生涯を映ったフィルムを巻き戻さなければならない。

何故1921（大正10）年なのか。これは賢治の無断上京の年で、この際、賢治の「筆で生計を立てる」目的への出発点があったからである。又、1921（大正10）年から1926（大正15）年の間に、賢治の人生における最も不愉快な出来事が起きるのである。妹の発病と死去、友達との別れ、父との摩擦などによって、賢治の精神状態は悪化する一方だった。

特に妹の死後、悲しみに打ちひしがれた賢治に「文学」と「信仰」という二つの逃げ道しか残らなかったため、彼の力をすべてそれらに注いだのである。この二つの手段を用い、賢治は心のなかに広がる壮大な「イーハトーブ」、そして「心象スケッチ」の世界を文章にして公開しようと思った。この状況の中で、賢治の期待の文学作品『春と修羅』と『注文の多い料理店』は生まれ、刊行された。

賢治の3つの野望

上述の通り、賢治にとっては文芸、そして宗教（法華経信仰）³⁴⁾ に全ての力を注ぎ込むことしかなかった。したがって、自分の作品を出来る限り普及させようと思い、本格的に文学者として生計を立てることにしたのである。自分の才能に全力を尽くし文学者として成功することは、当時の精神的不安定な賢治を救える唯一の方法であった。賢治は文学者として、三つの目標を狙っていたといえる。

1) 能力公認。

若い頃から、賢治は多くの文学作品を執筆していたが、それらについての客観的な評価を受けることはほとんどなかった。当初は賢治の作品を読む人は妹トシや友人保坂以外に非常に少なかった。従って、賢治は自分の文芸能力を客観的に認めてもらう第一歩を踏み出す必要性があった。賢治は自分の作品についての意見を様々な人々に聞きたいという願望を抱いていたことは明らかである。

2) 経済的独立。

賢治にとって、自分の能力や趣味を生かすことで経済的自由を獲得することには、二つの意味があった。

一つ目は精神的な問題の解決方法である。質屋を営むことによって、大金を稼いだ父政次郎は長男賢治にどうしても家業を継いでもらいたかった。ただし、それは賢治にとって、地獄のような場所だった。にもかかわらず、賢治は大人になっても父に養われ、時に何らかの理由で、相当の金額を要求することもあった。つまり、好きな文学活動で経済的自立を得ることは、あの父に対しての強い劣等感、そして父に頭を下げ、仕送りを要求する屈辱感を一気に追いつく意味があった。

二つ目の意味は、言うまでもなく、物質的に不自由のない人生を送ることだった。『雨ニモマケズ』そして多くの羅須地人協会時代の逸話に描かれる賢治のストイックな心はいわゆる「賢治神話」が生んだもので、非常に型にはまった、表面的なイメージに過ぎない。賢治は金銭を稼ぐことの必要性が充分に分かっていた。事業の計画も多く、その利益などを計算するのも上手だった。また、経済的自立を得ることは、勉強に役立つ本や資料、そして楽器、レコードなどをいつでも手に入れられ、多くの趣味を生かせる意味もあった。

3) 名声。

世間に知られること。時代に消えない足跡を残すこと。全ての人間に理解してもらうこと。これはあらゆる文学者、芸術家が追いかける最大の目的である。

1921（大正10）年7月13日、関徳弥氏に宛てた手紙において、上京し文学者として成功する夢に魅了されていた賢治は、

なるほど書く丈けなら小説ぐらゐ雑作ないものはありませんからな。うまく行けば島田清次郎氏のやうに七万円位忽ちもうかる、天才の名はあがる³⁵⁾。

と書いたこともある。これは単なる冗談なのか、本心なのか、俄かに判断できないが、彼は文壇での成長に複雑な感情を抱いていたのはまず、間違いない。

文学者としてのキャリア

さて、賢治はどれ位積極的に文学作品の執筆に励んでいたか、そしてどれ位それに自信があったかを理解するために、賢治の文学者としてのキャリアを調べる事が不可欠である。

1921（大正10）年に上京してから、賢治は本格的に文筆活動にとりかかる。上述の通り、長年かけて築いた自分だけの「幻想の世界」に形を与える必要性を感じていた。賢治は質屋で働いて無駄に過ごした時間を取り戻したいかのように、東京へ行き、無数の童話や詩を執筆しはじめた。数ヶ月間で不思議なイーハトーブの世界を何千枚の原稿用紙に書き記したと言われている。

賢治は同人誌『アザリア』の時代から、自分の作品を雑誌に載せる習慣があったが、賢治の文学者としてのキャリアは本格的に1921（大正10）年の暮れに始まったと見られる。

1921（大正10）年12月某日の友人保坂嘉内への書簡において賢治は書く。

愛国婦人といふ雑誌にやっと童話が一二篇出ました³⁶⁾。

ここで賢治は初めて童話「雪渡り」、を雑誌『愛国婦人』に載せてもらい、稿料

(五円)をもらう³⁷⁾。ここで賢治は当時の流行であった童話の作家としての才能をはじめて公式に認められ、現金という具体的な形で報われた。1922 (大正 11) 年にも、新たな自信を得た賢治は多くの文学作品 (童話をも含み) を生み続ける。

文学者として認められる目標に向かう次なる一步は 1923 (大正 12) 年のことである。この年に賢治は東京に下宿していた清六氏の元へ童話の原稿の大きなトラソクを持って行き、彼に頼む。

此の原稿を何かの雑誌社へもって行き、掲載させて見ろじゃ³⁸⁾

清六は東京堂³⁹⁾という出版社へ向かい、その原稿を預けるが、結局、全く相手にされなかったという。

遂に、賢治は 1924 (大正 13) 年 4 月『春と修羅』を私費で出版することになる。更に、同年 12 月に、『注文の多い料理店』の出版で賢治は野望を実現する新たなチャンスを自ら積極的に作り出している。しかし、この二冊は賢治の期待を裏切り、全く売れなかった。この大きな打撃に動揺していた賢治に、童話作家として新たな道が開かれそうになる。『注文の多い料理店』の装幀と挿絵を扱っていたイラストレーター菊池武雄氏は童話雑誌『赤い鳥』のイラストレーター深沢省三氏と友人だった。この繋がりで、菊池氏は賢治の童話『タネリはたしかにいちいち? んでゐたやうだった』の原稿を『赤い鳥』の主筆鈴木三重吉氏⁴⁰⁾のもとに届けた。ただし、鈴木氏はその童話に何らかのプロレタリア的な要素を感じ、「あんな原稿はロシアにでも持っていくんだなあ」⁴¹⁾とコメントし、結局、賢治の採用を断った。このように賢治は成功するための絶好のチャンスを逃してしまった。

同じ 1925 年に、賢治は詩人森荘巳池 (実名は佐一) 氏との長い交際が始まる。森氏は盛岡中学校出身で、賢治の後輩である。1925 年 2 月、賢治に手紙を送り、岩手県詩人協会に入るように彼を誘う。機関誌『貌』の創始者で、賢治はそれに複数の詩を載せたことがある。

森氏は妹トシや親友保坂氏の次に賢治の世界を最も理解していた存在だったといえる。賢治は

自分の詩や自分自身を良く理解してくれる少年がひとり見つかって嬉しい⁴²⁾

という言葉を捧げた。この人物は賢治の研究家でもあり、『宮沢賢治と三人の女性』、『宮沢賢治の肖像』等、多くの研究や覚え書きを残しており、賢治研究史上の功績は非常に大きいと言える⁴³⁾。

詩人草野心平氏との交際も 1925（大正 14）年に始まる。賢治は草野氏の雑誌『銅鑼』にも多数の詩を載せた。しかし、賢治は生涯この人と直接会ったことがない。

このキャリアを見ると、1921（大正 10）年から 1926（大正 15）年にかけての期間は、賢治にとって、文学作家として成功するために、相当の努力をしていた時期であることが明らかになる。ただし、賢治の期待は特に『春と修羅』、そして『注文の多い料理店』にあったので、これらの作品の出版事情について更に詳しく述べる必要がある。

『春と修羅』出版の事情

『春と修羅』は賢治が生前発刊した唯一の詩集である。その中に妹トシへの想いを表す『永訣の朝』等の著名な詩も含まれているので、これは賢治にとって非常に思い入れの強い、大事な作品である。従って、賢治はこの作品に期待と共に、相当の金額をかけて、1924（大正 13）年 4 月に関根書店から刊行した。この一冊は四六判箱入れ、320 ページからなっていた。発行された部数は 1000 部で、その定価は 2 円 40 銭、かなり高い本だった。その表紙は麻のような布で製造されて、装丁とタイトルの模様は画家の広川松五郎氏に任された。森荘已池氏は本の外見についてこのようにコメントする。

そのころ、こんな高貴な本が花巻でつくられるということは考えられないことであった⁴⁴⁾。

『春と修羅』を印刷したのは設備に乏しい花巻市の大正活版であったものの、丁寧に仕上げられたものだった。この様なものを自費で 1000 部を出すには、それな

りの金額、そして勇気が必要だった。しかし賢治はためらわず、この大胆な一歩を踏んだ。賢治は『春と修羅』の原稿を手にし、大正活版へと向かい、早速印刷を依頼した。そこで、賢治は「親父が株で儲けたので出してもらおう」という言葉を残した⁴⁵⁾。その他に、この一冊を出版するため、賢治は花巻市豊沢町の納豆商大内商店から400円相当の借金を負い、その金額の返済に困っていたとも言われている⁴⁶⁾。その頃、賢治は花巻農学校で教え、月々100円前後の給料を貰っていた⁴⁷⁾ことを考えれば、その金額の膨大さを想像することが出来るだろう。借金を背負ってまで『春と修羅』を出版する大胆な賭けに挑んだ賢治は自分の能力に自信があり、心の奥底に成功に対する強い期待があった。

『注文の多い料理店』出版の事情

『注文の多い料理店』は1924(大正13)年12月に賢治が出版した童話集である。この本は『春と修羅』と同じサイズ(四六判)であるが、それよりもページ数は少なかった(194ページ)。今回も1000部発刊されて、その定価は1円60銭だった。この一冊は『春と修羅』と違って、賢治が自費で出したわけではない。その頃、本論の第一・第三章に述べたとおり、童話・童謡ブームがあった。従って、「光源社」という小さな出版社の及川四郎氏と近森善一氏は賢治に自分の童話を公開するチャンスを与えたのである。

二人は賢治の童話集を叢書として次々に発行する企画を立て、その第一冊として、『注文の多い料理店』を出版した。

この本を出版するために、近森氏は、「光源社」が出したその他の出版物『病虫害駆除予防便覧』、『除虫菊の栽培』などの販売利益で工面できると思ったが、様々な事情により、その計画は狂った⁴⁸⁾。

森荘巳池氏の『宮沢賢治の肖像』において、その事情は詳しく説明されている。

『注文の多い料理店』が印刷できる二十日までに八百円送金する約束の及川さんは、有力な友軍を失い孤軍の大奮闘となった。

「二ヵ月で八百円を三十数回に送金しました。二ヵ月の約束が十日ばかり早く、とうとう全額送金したときは、愉快でしたナ。二冊出した本の代金を、

ほうぼうから送ってくるのです。それは二円、五円、二十円、三十円と、送金してきたまんま、すぐ東京に送りました。そのほか宣伝費に二百数十円かけ、二色刷りのものまで作って、県下の小学校へも送りました。宣伝ポスターも作ろうと宮沢さんと相談しましたが、それは作らずじまいでした。『注文の多い料理店』の表紙や挿絵を描いた菊池武雄さんが、県北福岡中学の先生になった赴任していたので、宮沢さんは福岡まで行って、描いてもらって来たのですが、『宣伝費にかなり金をかけているので、もうゼイタクはいっておられませんね』と、宮沢さんはいっておいりましたよ。それでごく淡彩にして、あっさりしたものでしたが、印刷しないでしまいましたよ。本は、はじめは表紙に紺紙を使い本文コットンペーパーのつもりでしたが、紺紙は一冊分十銭もするのでクロスにして、本文はラフにしました。最後の校正は宮沢さんがしました。」⁴⁹⁾

『注文の多い料理店』の出版費は予想を上回るものだった。光源社が以前出していた本の売上金充当額を大幅に超え、全部で、およそ二千元もかかったという。印税として、賢治は100部渡された⁵⁰⁾。

収穫の時

『春と修羅』、そして『注文の多い料理店』は、賢治にとって、二つの貴重な種だった。この二つの種を蒔き、それらが美しく芽生えるのを待っていた。この二つの作品は彼の長年の努力によって生まれたものだった。

果して、賢治が抱いた野望と期待はどの程度満たされたのだろうか。賢治の蒔いた二つの種から美しい花が咲いたのだろうか。

1) 能力公認

確かに、この野望は全く実現しなかったとは言えない。特に、『春と修羅』の心象スケッチは様々な人物に深い感銘を与えたことは事実である。賢治の詩集を褒め称えた人物の一人に、盛岡出身の文学少年森佐一（荘巳池）氏がいた。森氏は『春と修羅』が発行された1924（大正13）年に、盛岡中学校在学中で、その頃から文

学に変な興味があり、賢治の『春と修羅』を読んだ。これに感激し、「こいつは、たいへんだ、たいへんなもんだ」などとコメントしたという⁵¹⁾。それから二人の長い付き合いが始まった。

その他に、この頃賢治を兄弟のように尊敬し、彼の文学活動を積極的にサポートしていた人に関徳彌氏⁵²⁾、そして尾山篤二郎氏⁵³⁾ という二人の歌人もいた。関徳彌氏は若い頃、賢治の詩を読んでいて、更に法華経の熱心な信者であり、賢治と共に国柱会に入っていた。尾山徳次郎氏は『春と修羅』の背文字を執筆した者である⁵⁴⁾。

この三人は妹トシ、そして友人保坂の存在に取って代ることはなかったものの、彼らの敬慕とサポートのおかげで、賢治が更なる自信をもって文筆の道を歩むことが出来た。

『春と修羅』の僅かな反響は、東京にまで聞かれたこともある。1924 (大正 13) 年 7 月 23 日の読売新聞の記事に、辻潤氏⁵⁵⁾ は次のように述べる。

宮澤賢治と云ふ人は何処の人だか、年がいくつなのだか、何をしている人なのだか私はまるで知らない。しかし、私は偶然にも近頃、その人の『春と修羅』と云ふ詩集を手にした。近頃珍しい詩集だ、——私は勿論詩人でもなければ、批評家でもないが——私の鑑賞眼の程度は、もし諸君が私の言葉に促されてこの詩集をてにせられるなら直にわかる筈だ。

私は由来気まぐれで、甚だ好奇心に富んでゐる——しかし、本物とニセ物の区別位はできる自信はある。

私は今この詩集から沢山のコーテエジョンをやりたい欲望があるが、——わたくしと云ふ現象は仮定された有機交流電灯の一つの青い照明です (あらゆる透明な幽霊の複合体) ——と云ふのが序の始まりの文句なのだが、この詩人はまったく特異な個性の持主だ。芸術は独創性の異名で、その他は模倣から成り立つものだが、情緒や、感覚の新鮮さが失われてゐたのでは話にならない。⁵⁶⁾

また、次の日 (1924 (大正 13) 年 7 月 24 日) の読売新聞の記事に、辻潤氏は

次のようなコメントを残している。

若し私がこの夏アルプスへでも出かけるなら、私は「ツァラトゥストラ」を忘れても「春と修羅」とを携へることを必ず忘れはしない⁵⁷⁾。

と、賢治の作品を非常に高く評価している。これらの評価は賢治に文学者としての新たな自信や希望を与えはしたが、本の売り上げを伸ばすことも、賢治の名声確立することもなかった。

賢治の『春と修羅』を褒めている著名な人物は辻潤氏ではなかった。1924（大正 13）年 12 月の雑誌『日本詩人』において、この作品の特徴とオリジナリティについての佐藤惣之助氏⁵⁸⁾のコメントが載っている。

『春と修羅』この詩集はいちばん僕を驚かした。何故なら彼は詩壇に流布されている一個の語葉をも所有してゐない。否かつて文学書に現れた一聯の語葉を持ってゐない。彼は気象学、鉱物学、植物学、地質学で詩を書ゐた。奇犀冷徹その類を見ない。大正十三年の最大収穫である⁵⁹⁾。

童話集『注文の多い料理店』は雑誌『赤い鳥』の主宰鈴木三重吉氏にも評価された。上述の通り、賢治はその後、鈴木氏の雑誌に採用されるべく、童話の原稿を送るが、採用されなかった。

2) 経済的自立

この野望は全く実現しなかった。『春と修羅』と『注文の多い料理店』は共にほとんど売れなかったため、経済的自立どころか、『春と修羅』に投資した金額を取り戻すことすら不可能だった。つまり、賢治はこれらの作品の出版によって、相当の金銭的な損害を被った。

上述の通り、『春と修羅』1000部を出版するのに、相当の経済的支出が必要だった。その総額について詳しい情報は残っていないが、1部の製本に最低1.50円かかったとしても（『春と修羅』の定価は2.40円だった）、1500円ということにな

る。賢治がその膨大な資金を集めるために、借金までしたことを忘れてはいけない。しかし、賢治の全ての努力は無駄だった。森荘已池は『春と修羅』の惨めな運命について、次のようなコメントを残している。

宮沢賢治と、どういう約束があったのか知れないが、殆んど売れない『春と修羅』を「ケチネ氏⁶⁰⁾」は業を煮やしたのか、呆れたのか、神田の古本屋の市場へ出して、数百冊全部売り立ててしまった。その『春と修羅』が、大正十四年の東京の古本屋街に、どっと出回った。古本屋といっても、それは、主としてゾッキ本を売る露天で、夜店の古本屋さんである。戸板の上に並べて売る本には、かんばしからぬいろいろの本が、込みにうず高く、あるいは薄く、パラパラと置かれ、ならべられてあった。

その夜店の古本屋というのは、私が東京にいた大正末期には、神楽坂、渋谷、新宿、神田、早稲田などに夜になると現れた。夜店の古本屋では、高くていい本は、ベタベタ置かないで何冊かは片隔に立ててあった。『春と修羅』は、上製本の部類に入るのだろうか、その立ててある本の中にまじっていた。値段は二十銭から三十銭とついていた⁶¹⁾。

更に、草野心平氏はこう述べる。

『春と修羅』が刊行された翌年、私は中国の五・三〇事件のあおりをくって帰国したが、その頃神田の露天の古本屋では『春と修羅』は五銭で叩き売り同然の待遇をうけていた⁶²⁾。

また、借金だらけで破産寸前の出版社『光源社』から『注文の多い料理店』の残り在庫を買い取るために、賢治は父に三百円を借りる破目になった。その金額で賢治は200冊買った⁶³⁾。結局、経済の面でも、『注文の多い料理店』の挫折は、深刻な事態を招くことになった。

このように、賢治の経済的自立を獲得しようとする野望は崩れた。賢治がトシへの大切な想い、そして長年の努力を注いだ作品は30銭、20銭、5銭の値打ちし

なかったのだ。この余りにも厳しい現実には賢治に大きなショックを与えたのである。

3) 名声

『春と修羅』と『注文の多い料理店』が売れなかったから、賢治は経済的自立を得る野望を捨てていた。にもかかわらず、負けず嫌いな賢治は未だ作家として認知されたい気持ちを捨てることが出来なかった。したがって、実家の倉庫に眠っていた数百部の売れ残りを出来る限り広めようと思い、森佐一氏、草野心平氏などの様々な友人や知人に配っていた。1925年9月21日、賢治は森荘已池氏宛ての手紙にこのように書く。

それから今日別便で童話三十スケッチ集三十お送りしましたからそいつを思い切ってすばやく売り飛ばしてあなたの詩集のたしにしてください。⁶⁴⁾

又、草野心平氏も賢治から在庫の本を送ってもらっていた。

また誰れにでもいいから友達にあげてくれるように——という意味の私信といっしょに、賢治から蜜柑箱にぎっしり『注文の多い料理店』がおくられてきたりした⁶⁵⁾。

要するに、収穫の時、賢治の期待は全面的に裏切られた。確かに、賢治の蒔いた種は、幾人かの人の賞賛という貴重な芽をふいたが、余りにもひ弱で、岩手の厳しい気候に負けたかのように、成長を遂げず、枯れてしまったのである。この名声に向かっての最後の努力『春と修羅』と『注文の多い料理店』は時の渦に飲み込まれ、忘れ去られてしまった。

無論、広い意味で賢治は名声を得ることが出来なかったとは言えない。現在、賢治の作品を一つも知らない日本人は少ないだろう。更に、多くの外国語に訳され、世界中にも広まっている。

賢治は文学者としての挫折を認める

上述の野望、そして失望の点から、賢治の文学者としての活動を考えると、それは1926(大正15)年4月(羅須地人協会での自給自足生活を開始した月)の時点では、すでに破局を迎えていたという結論になる。この経験が賢治の胸に無限大の絶望と自己嫌悪、怒りと混乱、失望感とフラストレーションをもたらした。

1925(大正14)年2月9日に森荘已池氏宛の手紙において、これらの気持ちは鮮やかに浮かびあがる。

…私はあの無謀な「春と修羅」に於て、序文を主張し、歴史や宗教の位置を全く変換しやうと企画し、それを基骨とした様々の生活を発表して、誰かに見て貰ひたいと、愚かにも考へたのです。〔中略〕私はあれを宗教家やいろいろの人たちに贈りました。その人たちはどこも見てくれませんでした。「春と修養」をありがたうといふ言葉も来ています。〔中略〕辻潤氏 尾山氏 佐藤惣之助氏が批評して呉れましたが、私はまだ挨拶も礼状も書けないほど、恐れ入ってます。私はとても文芸だなんといふことはできません。…⁶⁶⁾

賢治は『春と修羅』で主張していた考えを、彼の言葉を使えば、「誰かに見て貰ひたいと、愚かにも考へた」のである。ただし、賢治の世界を理解しようとした人は非常に少なかった。

そして、賢治は「私はとても文芸だなんといふことは出来ません」ということばで、初めて自分の文学が失敗であったことを表明する。

協会設立直前の時期〔1925-1926(大正14-15)年〕、森荘已池氏は賢治の最も親しい、信頼できる友人だった。したがって、賢治はこの人物に自分の心を開き、その頃の乱れた内面と複雑な精神状態を打ち明けていた。1925(大正14)年2月19日、賢治は森氏にこういった葉書を送る。

しかもいま *Misanthropy* が氷のやうにわたくしを襲っています⁶⁷⁾

Misanthropy は英語で、「人間嫌い」という意味である。賢治はこの手紙から2ヵ

月後、農学校を辞める話を検討する。賢治を羅須地人協会へと押しやった力の源は正にこの *Misanthropy*、そして彼の複雑な精神状態なのではないだろうか。

賢治の最後の希望：岩波書店への手紙

森佐一氏宛の手紙において、賢治は自己嫌悪やフラストレーションをあらわにする。それでも、彼の野望に満ちていた心はまだ降伏したくなかった。賢治は挫折を言葉で認めても、心で決して認めたくない性格の持ち主である。この理由で、時に次のような異常な行動に及んでしまう。

1925（大正 14）年 12 月 20 日、賢治は出版人岩波茂雄氏^{68）} へ一通の手紙を送り、相当常識から外れた依頼をぶつける。

突然手紙などさしあげてまことに失礼ではございますがどうかご一読を願ひます。わたくしは岩手県の農学校の教師をして居りますが六七年前から歴史やその論料、われわれの感ずるそのほかの空間といふやうな事についてどうもおかしな感じやうがしてたまりませんでした。わたくしはさう云ふ方の勉強もせずまた風だの稲だのとにかくまぎれ勝ちでしたから、わたくしはあとで勉強するときの仕度にとそれぞれの心もちをそのとほり科学的に記載して置きました。その一部分をわたくしは柄にもなく昨年の春本にしたのです。心象スケッチ春と修羅とか何とか題して関根といふ店から自費で出しました。友人の先生尾山といふ人が詩集と銘をうちました。詩といふことはわたくしも知らないわけではありませんでしたが厳密に事実のとほりに記録したものを何だかいままでのつぎはぎしたものと混ぜられたのは不満でした。辻潤氏佐藤惣之助氏は全く未知の人たちでしたが新聞や雑誌でほめてくれました。そして本は四百ばかり売れたのかどうなったのかよくわかりません。二百ばかりはたのんで返してもらひました。それは手許に全部あります。

わたくしは渴いたやうに勉強したいのです。貪るように読みたいのです。もしもあの田舎くさい売れないわたくしの本とあなたがお出しになる哲学や心理学の立派な著述とを幾冊でもお取り換え下さいますならわたくしの感謝は申し上げられません。わたくしの方は二、四円の定価ですが一冊八十銭で沢

山です。あなたの方のは勿論定価で構ひません。⁶⁹⁾

この手紙を突然、直接岩波氏に送る発想は相当常軌を逸したものと言える。この様な行動をとった賢治の精神状態は明らかに安定を欠いていた。

1925 (大正 14) 年の賢治は作品の出版で溜まった借金を返済するのに必死だったのは事実であるが、実際、この手紙の最終目的はそれほど単純なものではない。もともとエクセントリックな人物と言ってしまうまでもだが、私見では、賢治の心は絶望に駆られ、最後の悪足掻きをしたように見える。彼はもう失うものではなく、一か八かの賭けに出た。大きな出版社に自分、そして自分の作品の存在を知らせることによって、賢治は採用されるのではないかと期待していたのだろうか。とすれば、余りにも幼稚な下心である。賢治は「辻潤氏、佐藤惣之助氏は全く未知の人たちでしたが新聞や雑誌ではめてくれました」とアピールしたところからこの下心をうっかり漏らしてしまった。

結局その後の展開がなかったため、賢治の手紙は無視された可能性が高い。そしてこの最後の僅かな希望も消え、数ヵ月後、賢治は羅須地人協会の活動へ踏み切ったのである。

結論

賢治は 1921 (大正 10) 年から本格的な文学活動を始め、この道を突き進む。最愛の妹が亡くなった時に賢治の心は激しく揺さぶられた。この時点で、賢治に生きていく力と快感を与えられる唯一のものは文学だった。

文学作品を出版し、文学者としての名声を得ることによって、彼は自分自身の存在を確認し、自分の時代に消えない足跡を残そうという意志があった。このように、賢治は文学、そして野心と夢と希望によって人生と闘い疲れた傷だらけの心を癒そうとした。

しかし賢治の努力がもたらした成果は彼の予想以上に乏しかった。この試みが失敗に終ることによって、賢治はもう一度孤独で厳しい現実に突き落とされた。賢治の文学者としての野心はシャボン玉のようにはじけてしまい、徐々に賢治の希望は絶望へと変っていった。

信頼できる人、生きる目的と力、そして正気まで失った賢治は、フラストレーションと絶望に身を任せ、羅須地人協会の自虐的な自給自足生活に踏み切った。

一方、賢治を文学の道に進ませた力は非常にポジティブであったといえる。なぜならば、文学活動は賢治にとって趣味であり、自分の闘い疲れた心を癒すための方法だったからだ。しかし、他方、彼を協会活動へ駆り立てた力はそれと異なり、紛れもなくネガティブなものだった。失望、絶望、フラストレーション、自己嫌悪は文学者として失敗を実感させた。羅須地人協会開設に踏み切る直前の賢治の胸を満たしていたのは、非常にネガティブな気持ちである。特に1925（大正14）年頃に書いた書簡の大多数においてこれらの気持ちが明瞭に現れている。

賢治は人生のあらゆる挑戦に挑んだ。しかしながら、人生に一度も勝ったことのない、人生の「完全なる敗北者」である。そして、1933（昭和8）年に無名のまま、「完全なる敗北者」として惨めにこの世を去った。

しかし人生の敗北者賢治は死だけを見事に制圧することが出来た。死後、彼は驚くべき勝利を勝ちとるのである。

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ
慾ハナク
決シテ瞋ラズ
イツモシヅカニワラッテキル…

これは宮澤賢治という人間の皮肉な運命と言えよう。

註

- 1) 下根子櫻は花巻市川口町、北上川下流の周辺に位置している。
- 2) 佐藤隆房（さとうたかふさ）氏は私立花巻共立病院の院長で、宮澤家の主治医であり、賢治の父親宮澤政次郎の懇意だった。『宮澤賢治』等の著者であり、S 博士と

しても知られている。

- 3) 佐藤隆房『宮澤賢治』富山書房 1942 pp.151-152
- 4) 前掲書 p.168
- 5) 前掲書 p.184
- 6) 宮沢賢治の実弟である (1904-2001)。
- 7) 宗左近『宮沢賢治の謎』新潮選書 1995 p.268
- 8) 福田清人・岡田純也編『宮沢賢治』清水書院 pp.84-89
- 9) 『画報近代百年史』第十巻 国際文化情報社 8月号 1954 pp.780-781
- 10) これは賢治の生きた時期である。
- 11) 岩崎爾郎『物価の世相 100 年』読売新聞社 1982 pp.286-301
- 12) 天沢退二郎、他『新校本宮沢賢治全集』第十五巻『書簡』筑摩書房 1995 pp.15-16
- 13) 前掲書 pp.75-77
- 14) この時期に、賢治は東京で人造宝石を造る計画を立てていた。
- 15) 前掲書 p.153
- 16) 1921 (大正 10) 年の初任給 80 円から、1926 (大正 15) 年退職時の給料 130 円だった。また、職務奨励として、5 円から 100 円の金額ももらっていたと見られる。
- 17) 大里恭三郎、他『文学に見る経済観 近代作家十人』教育出版 1986 p.159
- 18) 羅須地人協会は宮澤家によって、隔離病舎としても使われていた。
- 19) 青江氏によると、羅須という謎めいた名前は「松」という意味であるアイヌ語の「ラス」に由来している。確かに羅須地人協会の建物の周辺には複数の松の木があったのである。また、「ロシア」(英語発音: ラシャ) から来た説もある。「地人」はおそらく、内村鑑三の『地人論』から来ているのであろう。
- 20) 佐藤成 編『宮澤賢治 地人への道』菊池出版 1984 p.314
- 21) 天沢退二郎編『宮沢賢治万華鏡』新潮文庫 2001 p.166
- 22) 前掲書 p.167
- 23) 『宮沢賢治』第三号 洋々社 1983 pp.21-32
- 24) 佐藤成編『宮沢賢治 地人への道』菊池出版社 1984 p.378
- 25) 中村稔『定本・宮沢賢治』芳賀選書 1966 p.181
- 26) 1921 (大正 10) 年、賢治の教諭としての初任給は 80 円だった。毎年 10 円の昇給を受け、ボーナスも受けていた。〔大里恭三郎、他『文学に見る経済観 近代作家十人』教育出版 1986 p.154〕同じ 1921 (大正 10) 年に、朝日新聞で勤める大学卒業生の初任給は 70 円だった。又、1918 (大正 8) 年の大卒平均初任給は 62 円だった。〔岩崎爾郎『物価の世相 100 年』読売新聞社 1982 pp.286-301〕
- 27) 天沢退二郎、他『新校本宮沢賢治全集』第 15 巻『書簡』筑摩書房 1995 p.220

- 28) 賢治は花巻農学校の生徒達にこの詩を捧げた。
- 29) 中村稔『定本・宮澤賢治』芳賀選書 1966 p.166
- 30) 前掲書 p.167
- 31) 天沢退二郎、他『新校本宮沢賢治全集』第15巻『書簡』筑摩書房 1995 p.233
- 32) 前掲書 p.118
- 33) 前掲書 p.226
- 34) 賢治にとって、文学と宗教は同じことであった。
- 35) 天沢退二郎、他『新校本宮沢賢治全集』第15巻『書簡』筑摩書房 1995 p.217
- 36) 前掲書 p.220
- 37) 天沢退二郎編『宮澤賢治万華鏡』新潮文庫 2001 p.474
- 38) 宮澤清六『兄のトランク』ちくま文庫 1991 p.90
- 39) 『婦人画報』、『コドモノクニ』などを発行していた出版社である。
- 40) 鈴木三重吉 (1882-1936) 夏目漱石に師事して『千鳥』、『桑の実』などを発表する。
1916 (大正 5) 年、童話を書きはじめ、新興童話の急先鋒となった。『赤い鳥』を
主宰し、童話綴方の発達に大いに貢献した。[『画報近代日本史 第十集 1917-1923』
より]
- 41) 原子朗『新宮澤賢治語彙辞典』東京書籍 1999 p.176
- 42) 前掲書 p.711
- 43) 前掲書 p.711
- 44) 森荘巳池『宮沢賢治の肖像』津軽書房 1974 p.355
- 45) 前掲書 p.252
- 46) 大里恭三郎、他『文学に見る経済観 近代作家十人』教育出版 1986 p.160
- 47) 原子朗『新宮澤賢治語彙辞典』東京書籍 1999 p.576
- 48) 天沢退二郎、他『新校本宮沢賢治全集』第15巻『書簡』(校異本)筑摩書房 1995 p.112
- 49) 森荘巳池『宮沢賢治の肖像』津軽書房 1974 pp.252-253
- 50) 大里恭三郎、他『文学に見る経済観 近代作家十人』教育出版 1986 p.160
- 51) 原子朗『新宮澤賢治語彙辞典』東京書籍 1999 p.711
- 52) 関徳彌 (1899-1957) は花巻市に生まれた。ペンネームは登久也である。賢治の遠
い親戚でもあった。
- 53) 尾山篤二郎 (1889-1963) は金沢生まれ。
- 54) 賢治が気に入らず、刷り消していた「詩集」という文字も尾山が書いたものである。
- 55) 辻潤：評論家 (1884-1944) 東京生まれ。キリスト教、社会主義、虚無主義 (ニヒ
リズム) を遍歴。晩年は精神錯乱に陥り、餓死した。青年期はキリスト教の影響を
受け、女学校教師などもつとめたが、放浪生活に入ってから自らダダイストを

もって任じ、ロンプロゾー『天才論』(1914)やシュティルナー『自我経』(『唯一者とその所有』の全訳、1920)の翻訳でも有名。〔新宮沢賢治語彙辞典〕

- 56) 『読売新聞』大正13年7月23日 読売新聞社 1923
- 57) 『読売新聞』大正13年7月24日 読売新聞社 1923
- 58) 佐藤惣之助：詩人(1890-1942)。神奈川県生れ。小唄・民謡・歌謡曲の作詞も多い。詩集『正義の兜』、『華やかな散歩』、『ぐふうの眼』など。〔広辞苑〕
- 59) 森荘巳池『宮沢賢治の肖像』津軽書房 1974 p.352
- 60) 「ケチネ氏」は『春と修羅』の発行元になった関根喜太郎氏のニックネームである。「ケチン坊関根」の略号だったという。
- 61) 前掲書 p.361
- 62) 前掲書 p.361
- 63) 大里恭三郎、他『文学に見る経済観 近代作家十人』教育出版 1986 pp.160-161
- 64) 天沢退二郎、他『新校本宮沢賢治全集』第15巻『書簡』筑摩書房 1995 p.231
- 65) 森荘巳池『宮沢賢治の肖像』津軽書房 1974 p.361
- 66) 天沢退二郎、他『新校本宮沢賢治全集』第15巻『書簡』筑摩書房 1995 pp.222-223
- 67) 前掲書 p.224
- 68) 岩波茂雄(1881-1946)、出版人。長野県生まれ。東大哲学科選科出身。1913年(大正2)岩波書店を開き、岩波文庫その他学術書の出版を通じて日本文化の向上に寄与。貴族院議員。文化勲章。
- 69) 前掲書 p.234

〈キーワード〉宮沢賢治、羅須地人協会

Miyazawa Kenji and the Rasuchijin Society

—On the forces which drove him to this activity—

Giulio Antonio BERTELLI

The writer and poet Miyazawa Kenji (1896-1933) took a sudden decision at a certain point of his life. He resigned his position as a teacher at the Hanamaki School of Agriculture, and on April 1st 1926 (Taishō 15) he moved to a cottage owned by his father in Shimoneko-Sakura.

There, he started a life of self-sufficiency, plowing the piece of land annexed to the house, just like a "full-fledged" peasant. But this is not all. At the same time, in order to improve the miserable conditions of rural society of the late 1920s, Kenji, as a volunteer, also held courses on agronomy, record listening and story-reading sessions, and consultation on fertilizers. All these elements constituted the so-called Rasuchijin Society (*Rasuchijin Kyōkai*). So, what kind of forces drove Kenji to the activities of the Rasuchijin Society? The main purpose of this research is to give a satisfying answer to this question.

In order to attain this goal, in the first part I briefly depicted a "historical" portrait of Miyazawa Kenji, by examining the main events occurred in his life, his relationship with Tokyo's literary circles, and so on. Moreover, in order to prove Kenji's loose sense of money, I made an attempt to draw a simple sketch of the cost of living between 1896 (Meiji 29) and 1933 (Shōwa 8). Furthermore, in the last section of this chapter, I discussed the nature and the various activities of the Rasuchijin Society.

In the second part of my work, I analyzed the nature of the forces which drove Kenji to the activities of the Rasuchijin Society. Are these forces positive, as some Kenji researchers like Nakamura Minoru and Mori Sōichi stated, or are they negative? In order to solve this doubt, it is certainly necessary to analyze Kenji's condition just before he founded the Society. But this is still not enough. We need to go back in time until the year 1921 (Taishō 10). In fact, the five years going from 1921 (Taishō 10) to 1926 (Taishō 15) can be considered an extremely

important period in Kenji's life: we can say that his literary career started right after he moved to Tôkyô in 1921 (Taishô 10), where he gave birth to many of his works. Kenji's heart was full of ambitions, most of which, for various circumstances, he failed to realize... This failure as a man of letters was fatal for him. By putting a special emphasis on this point I drew my conclusions.